

【報告】

社会問題を扱った企画展示の開催 琵琶湖博物館「外来生物 一つれてこられた生き物たち」

The Special Exhibition deal with the Social problem

布谷 知夫*

Tomoo NUNOTANI

1 外来生物をテーマとした全国の企画展示

ここ数年、国内の自然系の博物館や水族館などで「外来生物」をテーマにした企画展示（特別展示などを含む）を行う例が増えている。これは日本の自然や生物多様性を考える上で、外来生物の影響が非常に大きくなってきていることが明らかになってきたためであり、それは例えば2002年に閣議決定された「新・生物多様性国家戦略」（環境庁自然保護局 2002）の中でも日本の生物多様性を脅かす3つの危機のうちのひとつとして、「移入種や化学物質による影響」が挙げられていることにも現れている。そして外来生物の定義のひとつが「人間が持ち込んだもの」というように、明らかに人間の行為による現象であり、外来生物をめぐる問題がさまざまな社会問題を引き起こしていることも明らかである。自然系の博物館においては、このような社会問題となる内容をテーマとした企画展示を行うことが少ないが、この「外来生物」においては例外といえそうである。

琵琶湖博物館においても2003年の7月から11月にかけて「外来生物」をテーマとする企画展示を開催した。この準備の期間に各地で同様のテーマで企画展示会が行われていることに気づき、琵琶湖博物館の学芸員が資料を集めて整理した（戸田、2004）ところ、2000年以後には以下のような例があった。もちろん見落としの可能性もある。2000年以前にもいくつかの例があるが省いた。またシンポジウムなどの一時的なイベントなども除いてある。

2000年

東京都井の頭自然文化園 特別展「危うし、日本の淡水生物～外来生物の脅威」 3月18日～8月31日

* 滋賀県立琵琶湖博物館

千歳サケのふるさと館 夏休み特別展示「外来魚～あれっ、昨日まではいなかったのに」 7月15日～8月31日

徳島県立博物館 企画展「侵入者たち 外国からやってきた生きものたちの光と影」 7月18日～9月10日

長崎バイオパーク「海を越えてきた生き物たち―帰化生物展」 10月7日～2001年3月4日
2001年

新潟市水族館マリニピア日本海 春季特別展「新潟県の外来生物」 3月25日～6月3日

佐賀県立宇宙科学館 自然観察ルーム企画展示「新顔の魚たち」 5月17日～6月3日

2002年

鳥羽水族館「外来生物展 海を越えてきた生きものたち」 4月16日～6月30日

岐阜県博物館 資料紹介展「海外からやってきた生き物たち」 7月20日～9月23日

姫路市立水族館 企画展示「捨てられたペットたち」 7月20日～9月1日

旭川市旭山動物園「移入動物の現状」 8月24日～10月20日

蒲郡市立竹島水族館 企画展「外来生物ってなに？」 10月2日～

2003年

神奈川県立生命の星・地球博物館 特別展「侵略とかく乱のはてに ～未来につながる自然とは」 7月9日～9月15日

小樽市博物館 特別展「外来生物とみなとまち小樽」 7月18日～9月23日

さいたま水族館 夏休み特別展「海外から来たあぶない魚たち」 7月19日～8月31日

滋賀県立琵琶湖博物館 企画展示「外来生物 つれてこられた生き物たち」 7月19日～11月24日

和歌山県立自然博物館 特別展「この生き物、取り扱い注意 知らずに増え続ける外国の生き物たち」 7月26日～8月31日

2004年

千葉県立中央博物館 企画展「持ち込まれたケモノたち―外来生物がおびやかす地域の自然」

2004年3月20日～5月9日

2003年の夏には五つの博物館が同時に同じテーマで企画展示を行うという状態であった。しかし、テーマは同じでも企画者の展示意図は異なり、それぞれが特色のある展示となっているようである。博物館の「展示」を考える上では、同じテーマの企画展示の内容を比較をすることは意味あることと考え、琵琶湖博物館で行った企画展示会の展示意図や展示内容などを整理し、報告するものである。

2 琵琶湖博物館での展示に対する考え方

琵琶湖博物館は1996年に開館した県立の総合博物館であり、「環境について一緒に考える」ということを展示の中心テーマとしている。この博物館の展示プランを作る段階の議論で、環境を展示するが、社会問題は展示しない、ということを決めている。それは、社会問題というものは、ある時代の社会状況下での価値観を含んだ捉え方であり、また特定の個人や集団での価値観が反映しているものと考えられるためである。博物館の展示では、「よりよい環境」を作るための提案や啓蒙をするのではなく、来館者が自分にとって「よりよい環境」とはどのような状態なのかを、展示室でのさまざまな例を見ながら自分なりに考え、その考えを持って自宅に帰り、自分が住んでいる地域での事例を改めて見直して欲しい、と考えている。

そのため具体的な展示作りでは、地球温暖化や熱帯林の問題などの遠くの問題ではなく、日常の水利用や身近な生き物などを材料にして、自分の暮らしにとっての環境について考えることができるように考えた。

そしてこれは琵琶湖博物館で考えている一般的な展示作りにも共通した考え方である。つまり博物館は教育をする場所ではなく、展示は特定の内容の知識を覚えてもらう場所とは考えない。展示室内で思いがけないような発見があったり、思い込んでいたことに違った考え方があることに気がついたり、ずっと忘れていた昔のことを思い出したりと、新しく知る情報とともに、各来館者の個人史に結びつく体験ができる場と考えたい。そういう考え方の展示室であれば、当然のことながら、教えることよりも、利用者が主体となって、一緒に考える場ということになる。

3 企画展示会のプランから実施まで

琵琶湖博物館では企画展示会の実施は年に1回のみであり、だいたい実施の4～5年前にテーマを決め、主担当を決め、準備をしながら担当を加えていくことになっている。今回の「外来生物」の企画展示も魚の生態学を専門にして同時にオオクチバスを中心とした外来生物問題に発言をしている学芸員が担当することになっていた。

準備を始めた当時は、琵琶湖の外来魚問題の議論がピークにあった時代であった。漁獲量が激減し、エリで捕獲される魚の大部分が外来魚となっており、外来魚を減らすためにはどうすればいいのか議論され始めていた。そしてそのような議論がバス釣りの人々と競合して、対立関係がはっきりとし始めていた。

このような背景の中で外来生物をテーマとした企画展示を行う場合に、博物館として、どのような主張を行う必要があるのか。とくに琵琶湖をテーマにした琵琶湖の博物館が外来生物を扱う展示で、この外来魚をどう扱った展示を行うのか、ということは大きな議論となった。一方で琵琶湖博物館の学芸員個人としては、外来魚による影響の説明や、リリースの禁止、密放

流の取り締まりなどを求める議論を進めていた。

準備を始めた当初の議論では、「外来生物を幅広く扱いつつも、オオクチバスのように、はっきりとした害があることが明らかなものについては、放置しては問題が大きいこと、対策をたて、対処していくことが必要であることを主張する」ということであった。しかし全国各地で大きな問題となっている外来生物は数多く、沖縄のマングースやノネコ、小笠原のヤギ、和歌山や青森のタイワンザルなど、上げていくときりがない。しかし一方では、問題が大きいことを数多く展示することで、外来生物イコール悪者、というようなイメージの展示になってしまうことを心配した。琵琶湖博物館の本来の理念から言えば、いろいろな意見がある、ということを示し、判断するのは来館者、ということになるはずだからである。

このあたりの整理をどのように行い、伝えたいメッセージを何にし、展示のストーリーラインをどう作っていくのか、ということが、まず展示プランを作っていくための課題であった。

担当者のチーム6名と博物館の学芸員との相互の議論を繰り返し、担当者以外からも意見を聞く中で、基本的な展示のメッセージを決定した。それは外来生物の定義をもっとも広く扱って、植物などと言われてきた史前帰化を含むことにしたうえで、外来生物の種類は非常に多く、整理すると 1) 今では外来生物であることを気がつかないような、日本の自然になじんでしまった種類 2) 人の暮らしの中で、今ではなくてはならないようになっている種類 3) はっきりとした害を起している種類、と三つに分けることができることを示し、それぞれの紹介をした上で、特に害を起している種類は、ごく最近になって人が意図的に持ち込んだ種類が、結果として害を起すようになったことを示す(中井克樹・布谷知夫 2003) ことにした。さらに害を起している生物の場合には、導入目的に対して、予想外の行動や結果を巻き起こしているものが多いこと、ペットの場合も同様であること、などを具体的な例で展示することにした。

例えばマスコミでも大きく取り上げられた和歌山県のタイワンザルとニホンザルとの雑種の問題は、すべてを捕獲して安楽死させることになった。反対意見はあるものの、ある程度の社会的合意を得たということであろう。いまや絶滅寸前というニホンバラタナゴという魚の場合も、数が激減した理由はタイリクバラタナゴという外来種との雑種が増えて、日本の種類がほぼいなくなったということであり、これも非常に分かりやすい。

しかし例えば日本のタンポポと外来種のタンポポとの雑種ができて、都会近くでは日本のタンポポはほとんど見られなくなっているという状態や、昔から子どもの遊び相手であったオナモミという大型のヒツキムシがいまや西日本からは絶滅し、東日本でも絶滅寸前になっているような事実はほとんど認識されていないし、だから外来種をとってしまおうという意見にはならない。動物と植物に関する認識に大きな差があり、外来生物というだけでは議論ができない。

そしてこのような動物や植物の例とオオクチバスなどとの一番の違いは、外来種がいることで「経済的に得」をしたり、「楽しみがふえる」人たちがいることである。外来種の問題は人間の問題にならざるを得ない。このように、暮らしの中に見られる具体的な事象を見ることで、外来種の問題というのは、人間が自然とどのように付き合っていけばいいのか、ということを変更して考えることにつながることを示そうとした。

このようにして社会問題となっている現象の本当の原因はどこにあるのかを、身近な例の中に見出して誰もが議論に参加できるようにした上で、生物多様性に対して、あるいは人間の現実の暮らしに対して害になる部分についてははっきりと指摘した上で、その対策に対しても、見解を示すという形で、展示を作ることにした。

また琵琶湖博物館には水族企画展示室があり、企画展示の際には実物を使った比較的似かよったテーマで水族企画展示を行ってきた。今回は、魚類、カブトムシの仲間、シマリスとヌートリアなどを展示して「外来生物 つれてこられた生き物たち—そのペット、あなたは飼い続けることができますか—」というテーマで、ペット問題に焦点を当てた展示を行うことにした。

このような大きな方向を決めた段階で、2001年度の後半から、展示制作会社（株式会社日展）に入ってもらい、具体的な展示作成にかかった。

4 展示プラン

展示テーマが非常に硬いため、展示はできるだけ親しみやすい、わかりやすいものにしようとした。そのため、展示室全体を「外来生物研究所」、来館者を研究員と見立て、来館者全員に「調査員手帳」という手帳をわたし、展示室の中には調査をしてスタンプを押す「Mission」のコーナーを6箇所設けた。そこではそれぞれ展示を見るための設問があり、その展示を見ながらスタンプを手帳に押していくというものである。ちょっとしたクイズ感覚で見学しながら、同時に基本的な展示部分をミッションにしあげて、そこはきちんと見てもらうことができるようにしようということである。

企画展示室の面積は約550平方メートルある。受付カウンターはチケットの確認と手帳やチラシを渡し、出口で調査員手帳に調査員認定証のゴム印を押すことにしており、その2名と展示室内を巡回して、Missionの進め方などを説明する役割の合計3人のスタッフが毎日ついた。

展示会の各コーナーの名称は以下のようにした。

- 0-0 事件発生
- 0-1 導入
- 0-2 あなたにとって生き物とは
- 1-1 身近な環境の中の外来生物
- Mission 1 在来種をさがせ

- 1 - 2 暮らしの中の外来生物
- 2 - 1 外来生物とは
- 2 - 2 暮らしの変化と外来生物の増加
- 2 - 3 日本に侵入した外来生物

Mission 2 進入の原因を探れ

- 2 - 4 滋賀県の外来生物
- 2 - 5 植物の進入

Mission 3 さく葉標本を完成させよう

- 2 - 6 日本から進出した生物
- 3 編集会議
- 4 - 1 外来生物の実態（各地からのレポート）

Mission 4 事件現場をチェックせよ

- 4 - 2 海外レポート
- 5 ブラックバスシアター

Mission 5 キーワードを探せ

- 6 - 1 移入のルールについて
- 6 - 2 ペットショップ

Mission 6 あなたはペットを飼える？

- 6 - 3 外来生物、効用と問題点
- 7 - 1 外来生物へのとりくみ
- 7 - 2 ビデオライブラリー
- 7 - 3 学芸員からのメッセージ

たとえば、「身近な環境の中の外来生物」のコーナーでは、2メートル四方程度の、里山、市街地、琵琶湖、水田の写真の中にハガキほどの生物の写真がめくり板ではってあり、その生物写真をめくると、その生物が在来生物か外来生物かと個別生物の情報があり、在来生物の場合には、中にもう1枚のめくり板があって、そのめくり板をめくると、中にスタンプが隠されていて、そのスタンプを調査員手帳に押すというものである。全体で40枚の生物写真があり、その中で在来生物は8種類になっている。外来生物の中には、スズメ、カワラバト（ドバト）、ヒガンバナ、レンゲなど、どうしてこんな生物まで外来種、と思うようなものまでが含まれているために、来館者の印象は非常に強いようである。スタンプを探すためにめくり板を次々に開く、という側面はあるが、結果としてこの生物が外来生物であるかどうかを確認すること



写真1 企画展示の入り口周辺。生物が持ち込まれたことを想定して、ダンボールに郵送用のラベルなどが貼ってある。

につながるという効果が現れている。

「くらしのなかの外来生物」では学校の場面と家庭の場面を設けて、例えば学校で問題になることの多いビオトープやケナフを取り上げ、若い熱血先生と熟年の先生とが子どもたちとともに議論をしているところを「切り出し」などを使った教室のしつらえと簡単な映像を使って示したものであり、答えを示すのではなく、どうしたらいいのかを一緒に考えてみよう、ということを表示した。

2の項目のコーナーは全体が資料室としてあり、基本的な言葉の意味やさまざまな情報を提供するというコーナーである。4では、国内27箇所と海外の二つの湖での外来生物が起こしている社会問題を紹介するコーナーで、簡単な解説とすべての場所での映像を見ることができる。7の「外来生物へのとりくみ」では、滋賀県の各地の学校や市民団体などが外来生物にかかわって活動している様子を壁新聞式で展示しており、総合的な学習の中での外来魚調査や河川での魚調査の様子、地元の農業高校で行われたブルーギルをつかった「ナンポラー」作り（湖南プラー）などが紹介されている。そして「学芸員からのメッセージ」では、学芸職員全員が顔写真とともに外来生物に対する自分の意見を掲示し、主催している博物館の中でもかなりの意見の差があることをあえて示すことにした。

5 調査員手帳

すでに述べたように今回の展示会場をひ

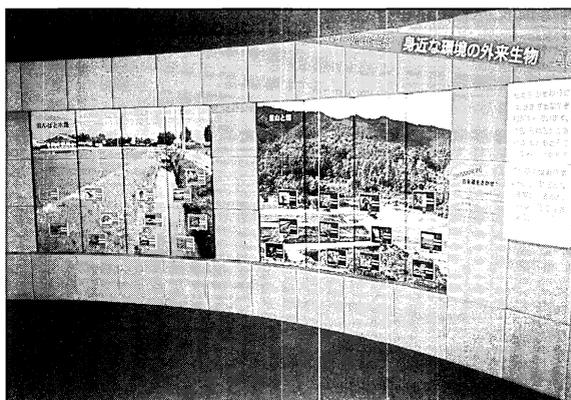


写真2 「身近な環境の中の外来生物」の二つのシーン、ダンボールの壁に生き物の小さな写真



写真3 生き物の写真をめくると、中に解説がある。

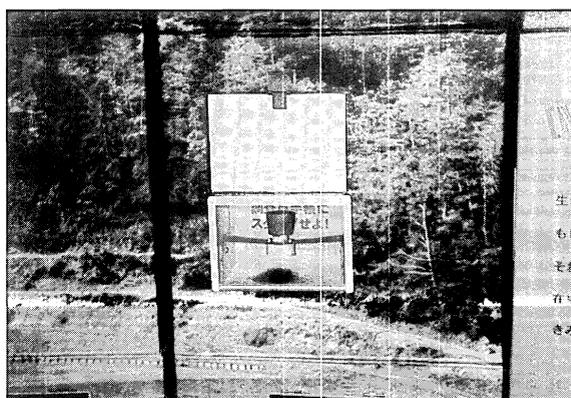


写真4 生き物が在来種であった場合には、中のラベルをめくると、その中にゴムで固定されているスタンプがあり、手帳を箱の下に置いてスタンプを押す。

とつの研究所に見立て、来館者全員をその研究所の研究者として、調査員手帳を入り口で配布し、その手帳を持って展示を見ていただいた。いわゆる展示見学補助手段である。

この手帳は当初の計画ではやや小さめの手帳を考えていたが、予算と使いやすさ、スタンプを押す面などを考えて、B7サイズ、裏表16ページのジャバラ折の手帳とした。片面（8ページ）に三つずつのミッションを割り当て、ミッションに従って展示を見ながら、答えを見つけ、その場所ごとのスタンプを手帳に押していくわけである。

子どもはスタンプが大好きなので、シタンプを押すだけになってしまうのではないかという意見も事前にはあったが、むしろ素通りしてしまうような場所で、スタンプを押すために展示を確認するということが効果があったと思われる。バックして前の展示を確認しなければ答えがわからないところがあったり、メイン映像（約15分）では一番最後まで見ないと答えになるキーワードがわからないため、一般的には長時間は見られないことが多い映像を、最後まで見てもらえるというような効果があった。

展示は来館者が自由に見ることができるようにしておくのが原則であるかもしれないが、展示の意図をより強く伝えるための方法としては、人の解説よりもむしろ適当な展示補助素材のほうが効果が上がるかもしれない。それは展示解説を人が行うと、どうしても解説者が主体になってしまいがちで、一方的な情報伝達になる可能性が高い。その意味では来館者が自分で選びながら展示を見ることができるようツールとして、今回の手帳のような補助手段は効果的であると考えられる。

6 ダンボールを使った展示

今回の企画展示の大きな特徴は、展示室

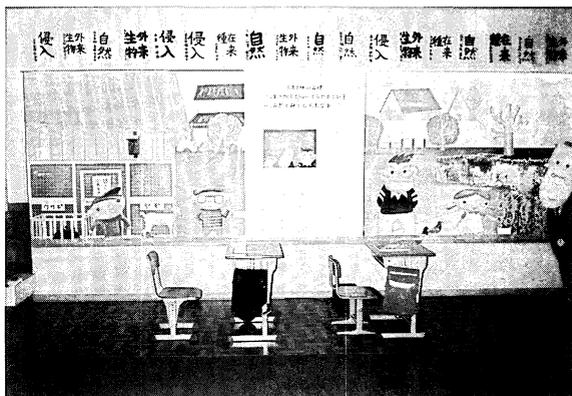


写真5 「くらしの中の外来生物（学校編）」、展示ケースの中に剥製などを置き、教室の窓から外が見えているようにしつつ、真ん中の映像で議論が進む。

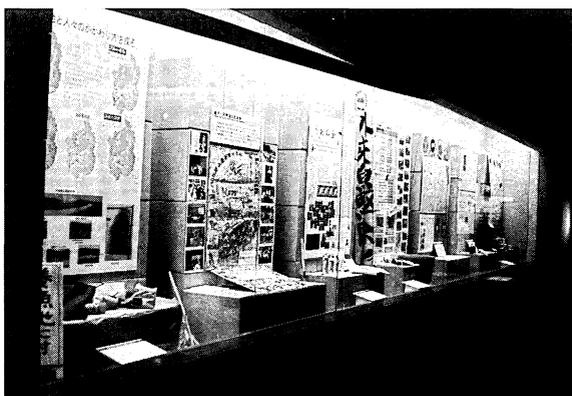


写真6 「外来生物へのとりくみ」、住民グループによる展示。

内外の壁面や造形は、すべてダンボール箱を積み上げて使ったことである。これは短期間の展示会が終わった後に、大量の廃棄物が発生することが多いため、できうるかぎり廃棄物を出さないようにしようという展示会社からの提案（株式会社日展 2002）を受けて実施したものである。

さらに展示内容についての議論を進める中で、「つれてこられた生き物」というイメージをダンボール箱に入れて運んでこられたというイメージとダブらせて考えると効果的であるという考えが浮かび、結局、展示会のマークもダンボール箱の中から外を見る目がのぞいている絵を作った。

展示室内の壁面などもすべてダンボール箱を両面テープでとめたもので作りこんだため、展示会途中でいたずらがされたり、破損するのではないかと心配し、予備のダンボール箱をある程度の数は確保してあったが、そのような心配は不要で、約4ヶ月間の企画展示期間が終わった時点でも、破損した箱はなく、人が手をついたりするような場所がやや柔らかくなったりしている程度であった。展示室内のイスはダンボール箱の中に木の枠を入れて補強したものであったが、これも最後まで無事であった。

逆に軽いために必要に応じて、簡単に移動ができたりする利便性は予想外であった。企画展示開始以後に、入り口周辺の動線の変更を行ったが、ダンボールの塊を一人で押すだけで作業は終了した。

またすべてダンボールに徹するため、テーブルなども上にシナ合板を貼り付けたダンボール、イスは内側に木の枠を入れたダンボール、入り口のパネルや切り文字、受付のカウンターもダンボールであり、来館者からは、これもダンボールですか、と半分呆れ顔ながらも面白がられて好評であった。

そして企画展示終了後の撤収においては、ひたすらダンボールを折りたたむ作業が続いた。実はダンボール箱を希望者に提供することをアナウンスしたところ、400個程度の箱の使用希



写真7 右手が「効用と問題点」、正面が「学芸員からのメッセージ」、すべてダンボールの壁面。

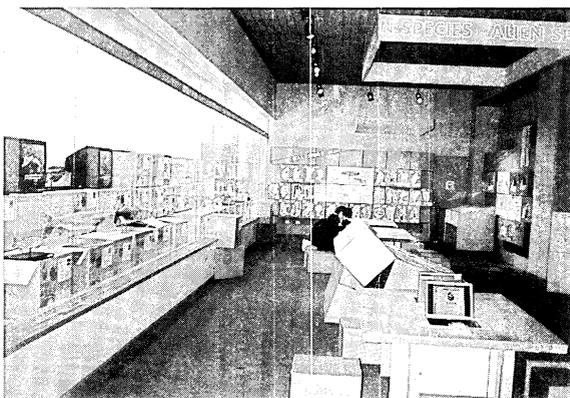


写真8 「資料室」滋賀県で見られる外来生物の剥製や映像など、正面は植物標本。

望があり、そのほか展示した机や什器などについても引き取りの希望者があり、廃棄物は最小限に抑えるとともに、リサイクルとリユースがかなりの程度に成功したと考えられる。

なお、展示期間中にJICA博物館コースのザンビアの研修生が来館した際に、この展示会を見てもらったが、この方法ならば自分でも作れる、と大変な感激ぶりであった。展示室の壁面や展示面をダンボール箱を積み上げて作るという方法は、比較的金をかけず、近くにあるものを使って展示室を作り上げるということが可能になることに改めて気がついた。

7 来館者の反応

今回の企画展示は、112日間の開催で、59,549人の入場であった。琵琶湖博物館では常設展示の入場料以外に、企画展示の入場料を別にいただいている。今回の企画展示会の期間中の総入館者数のうちの約25%の方に企画展示を見ていただいたことになる。比率でも実人数においても、琵琶湖博物館の過去の企画展示会の中ではもっとも大きな数であった。

企画展示入館者の数が多かったことは一般的に注目を集めるテーマであったことやそれなりの広報の努力の結果と思われるが、会期中のアンケート用紙の回収率が1割を超えて非常に高かったことはやはり関心の高さを示すものであろうし、その記述内容も非常に面白いものであった。

特に注目すべきことは、企画展示の最初のテーマとして最も重要と考えていた、ごく普通に見られる生物の中にさえ外来生物がある、というメッセージは、その意外性もあって、強く印象付けられた様子であった。最初の展示である「在来種を探せ」は、景色の中の小さな写真をめくってそれが外来種か外来種かを区別するという展示であった。めくってスタンプを探すだけになるのではないかという指摘も事前にあったが、感想でもっとも多かったのはそこにあったスズメやモンシロチョウ、ヒガンバナなどが外来種であるということに対する驚きの声であった。

なるほどと思ったけれどもスズメだけはどうしても納得がいかない、とカウンターに質問に来るような人があり、呼び出しを受けて説明をすることも多かった。

滋賀県の外来生物問題として大きい話題になっているオオクチバスやブルーギルの問題は多くの人が知っているため、おそらくそういう問題が展示されているという先入観あるいは期待があって、企画展示に入室される人が多いために、まず最初の展示でその部分を打ち消して、博物館の側の展示ストーリーに入れてしまうということに効果があったようである。そういう先入観をなくすことで、あとに続く身の回りの外来生物に関するさまざまな意見や、人の勝手に起こるペット問題などについても、自分で考えながら見ることに繋がった。

またもうひとつの多くの意見が集まったのは、やはりオオクチバスなどに対する考え方であった。展示の中ではオオクチバスが増えたことの問題点の指摘があったこともあって、それに

賛成の意見は多かった。しかしそれだけでなく、人間の身勝手さ、バスつりをしている人の立場からの意見、外来生物をとりまく難しさなど、さまざまな意見が集まった。そしてこのようなアンケート調査にしては、遊びやふざけて書いたような用紙が非常に少なかったことは印象的であった。

8 むすび

社会問題となっている「外来生物」を扱った企画展示の経過と展示内容、そしてその結果を報告した。博物館からのメッセージを明確に整理することで、展示として作りこみのしやすい、分かりやすい展示となったと考えている。そして展示の手法としてハンズオンの展示や展示見学補助のための手帳などの活用は、来館者にとって展示に集中するための手段になったと考える。

また同様のテーマで各地の博物館で企画展示などが行われたことから、展示を比較することで、博物館の展示のあり方や作り方についての議論が可能かと考えて、琵琶湖博物館の場合について報告を行った。

なお、今回の企画展示のすべてのパネルや情報は、A4サイズに作り直し、また映像はすべて1枚のDVDにして、7つの展示コーナーごとの単位で、学習キットとして学校などに貸し出すことができるようにした。必要なテーマについて貸し出し、可能な場合には学芸員が説明もしながら、外来生物を通して人間の自然利用について考えることができれば良いと考えている。

引用文献

- 株式会社日展 2002 第11回企画展時「(仮) 外来生物」基本計画書
環境省自然保護局 2002 いのちは創れない—新生物多様性国家戦略. 24pp
中井克樹・布谷知夫 2003 導入編・身近にいる外来生物. 第11回企画展示「外来生物—連れてこられた生き物たち」解説書 滋賀県立琵琶湖博物館：8-27
戸田孝 2004 「外来生物展」とインターネット連携 博物館研究 29(3)13-16